
カニバルクライシス

fanril

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カニバルクライシス

【Nコード】

N2394BA

【作者名】

f a n r i l

【あらすじ】

特に友達が少ない主人公長谷川はあるとき目にした人食いから興味を持たれ追いかけられる

犠牲者（前書き）

はじめまして。fanriiです。初投稿ですので見づらい等ある
と思いますがよろしくお願いします。

犠牲者

僕は私立京成学園の2年長谷川慶二だ。別になんてことない、普通の高校生だ。友達が少ないのが少々の悩みつてとこだ。もつともそれは人目を気にしているからであり、こいつボツチだなと思われるのがいやなだけであつて、別に本気で友達がほしいわけじゃあない。そもそも後1年ちよつとでさよならになる人間とかかわる必要ないよね。全国のボツチがそう思つてるさきつと。そんな感じで僕は無駄な思考で昼休みを潰していると僕に話しかけてくるやつがいた。

「よお、ハセ。ゲーセンにシューティングの新作出たらしいぜ」

そういつて話しかけてきたのは、僕の数少ない友達一谷淳だ。こいつは重度のアーケードゲームオタクでコンシューマーはやらないのにアーケードには何十万単位でつき込んでいる変わり者だ。しかもアーケードのコンシューマー移植は一切許さないという筋金のゲーセン野郎だ。ちなみにアーケードゲームなら音ゲーから格ゲーまでなんでもやるやつでもある。

「3日くらい前 رفتばかりじゃないか。今月はさすがににお金ないよ」

まあ別に金がないわけじゃないけどこいつに付き合つてたらいくらあつても足りないからね。僕の生活のためにもこつやつて断つておくに限る。すると淳は残念そうに、

「そうか、じゃあ適当な奴さそつていくわ」

そういつて淳は誘えそうな奴を探しに行った。別に僕を誘う必要もないのに誘いに来るなんて変わった奴だ。そうして誘いを断つた僕はいつものように鞆からゲーム機をとりだして遊びだした。そうしていつものゲームで時間をつぶす昼休みに戻った。

適当にゲームしていたら時間が来たので授業が始まった。正直面

倒なので寝ることにする。そうして僕は眠りに入った。

「起きてください、先輩」

頭上からいきなりかけられた声によって僕は目を覚ました。多分声からして後輩の白銀雪風だろう。寝ぼけた目で僕はその声の方向を向いた。

「先輩？」

思ったとおり白銀だった。こいつはなぜか僕に話しかけてくる変人ナンバー2だ。ちなみにナンバー1は淳だ。どうでもいいか。

「先輩、こんな時間に何で寝てるんですか。今日は一緒に帰ろうって約束したじゃないですか。忘れたんですか？」

寝起きの僕に向かってこんなことをいい始めた。ちなみに僕はそんな約束をした記憶はない。時々記憶にないことを言い出すからこの後輩は困る。別に嫌いじゃないけど。

「さ、先輩いきましよう。遅れた罰として私の行きたい所によってもらいますね」

そんなことを言っ僕を市街のほうへ連れ出した。正直僕は市街は人が多くて苦手なのだがこの後輩はそんなことを気にせず僕を引っ張っていった。仕方なく僕はついていくことにした。

きつと僕はこのときこの誘いを断るべきだったのだろう。そうしていればこんなことに気がつくこともなかったのだから。

白銀に連れられて市街まで来た。相変わらず市街は人ごみが多くて嫌いだ。コミュ障の僕にはとてもつらい。もっともこの後輩にこのことを話してもわかってもらえないだろうが。

「先輩。そのカフェに入りますよ。ケーキがおいしいって有名なんです。付き合ってもらえますよね？」

そういつて拒否できない笑顔で僕に問いかけてくる。こうなった

ときなにを言っても聞かないことがわかってる僕は無駄な抵抗を諦め、「す、好きにしろよ」というしかないのだった。

カフェに入るやいなや白金はこれに決めたといい店員を呼び始めた。どうやら僕が決めるのを待つてはくれないらしい。仕方がないので僕はコーヒーだけ注文した。

「ここはですね、ミルフィーユがおいしいって評判なんですよ」

こいつは人に注文をさせもしなかったくせにこんなことを言い出した。どうやら素で言っているらしい。もっとも悪気があるにしろ無いにしろ僕にとっては最低な行いだ。腹が立つことこの上ない。もっとも財布の中身が少ないので余計な興味を持たずにすんだのかもしれないが。

「で、ですね。この……」

どうやらこいつはこのオススメを話し続けるらしい。僕はその話を適当に受け流すことにした。

「じゃあ先輩。さようなら」

食べ終わった後そんなことを行って白銀は帰っていった。まったくはた迷惑なやつだ。

仕方なしに僕もひとりで帰ることにした。

ところでホラー的な要素とは一人にいるときにおきるものだ。特に街中で起きるときは周りに一般人すらいなくなるものだ。まさしく今の状態だ。目の前には黒い犬。振り返ったら後ろにもいた。物語的には動いたら襲ってくるだろう、これ。とりあえず30秒ほど待つてみた。10秒、20秒、25秒、30秒。特に状況に変化は無かった。この辺は特に人通りが少ないわけではないのだが、今このときはまったく人通りが無いようだ。仕方ないので少し前に進んでみた。どうやらまだ犬の機嫌を損ねていないようで犬は動かなかった。そこで気づいたのだがどうやら左側に小道があった。少し見てみると犬はこの先にはいないようだ。僕はあわててその小道に逃げ込んで全力疾走した。

少し進んだところで何かが前に二つ見えた。暗がりによく見えな

いが人間のようだ。ただそのうちの一人は倒れているようだ。もう一人のほうはその上にのしかかってなにかやっている。なぜかのしかかっているほうの人間から変な音がする。よく聞いてみると最近ネットでいうクチャラ

ーと呼ばれるものに近い音だと思った。ちなみにクチャラーとは食べ物を食べるときにくちゃくちゃと音を立てることからきている。この時点で僕は本能的に察したのだろう。先ほど飲んだコーヒーを僕は吐き出した。それからなにも口から出てこなくなったころ、目の前の人間が僕に向かって近づいてきた。そのとき一瞬だけその人間の容姿が見えた。可愛い顔した女だった。それを見た瞬間僕は気を失った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2394ba/>

カニバルクライシス

2012年1月6日00時46分発行